

学会ニュース

日本女性学会

第8号 1981年10月

〈第5回研究報告会 報告要旨その1〉

大山捨松の生き方について

京都市立看護短期大学 亀山 美知子

大山捨松は、万延元年(1860)、会津藩士山川尙江の七女、咲子として生まれた。その後、会津藩は崩壊し、明治維新を迎えた。四散していた会津藩の人々の中で、山川家も苦難の日々を送ることになったが、長兄浩は陸軍に入り、三男健次郎(後の東大総長)は留学生としてロシアに渡り、明治4年1月にはさらにアメリカのエール大学に赴いた。咲子は一説によれば函館の牧師のところへ預けられていたとされるが、北海道開拓使次官黒田清隆の提言になる女子留学生の1人として、アメリカに渡ることになった。明治4年末のことである。このときの女子留学生の誕生は、北海道仮学校内の婦女学校と目的を一にし、将来の国家を支えるに足る賢い国民を生み育てる母として教育することになった。

12歳で渡米した咲子(このときは捨松と改名)は、ニューヘブンの親日家の牧師(先の函館の牧師と同一人物との説もある)レオナード・ベーコンの家に預けられ、小学校、女学校と通った。そして、アメリカの名門女子大学 Vassar Collge へと進んだ。この間、兄健次郎との交流もあり、日本語の指導はもちろん、国際状況の中の日本のおかれた位置などの政治問題にも関心を高めるようになっていった。捨松が、明治15年(1882)6月の卒業式の弁論大会で British Policy toward Japan という演説を行なったのは、その影響であったといえる。なお、この当時のアメリカでは女権思想の台頭がみられたということは、非常に興味深い。11月に帰国するまでの間に、捨松はニューヘブン病院(この詳細な資料は今のところ不明)で、看護婦の資格を取ったとされる。アメリカにおける看護婦の職業的確立もまた、同時代であった。

帰国してからの捨松は、当初の感激も束の間で、失望することが多かった。彼女たちを受け入れるべき北海道開拓に関する女子教育はおろか、日本では女子教育そのものの発達は妨げられたままであった。捨松は、何をすることもなく日を送り、やがてかつての会津の敵、薩摩出身の陸軍卿大山巖に

請われて結婚した。一躍、上流社交界の花形となった捨松は、貴婦人たちで組織された婦人慈善会のメンバーとなる。この慈善会は、わが国における婦人活動の初期のものである。明治17年、有志共立東京病院の見学に行った捨松は、看護婦導入のための資金援助を行なった。これが鹿鳴館で開かれた慈善バザーの目的であった。さらに、明治20年に設立された日本赤十字社篤志看護婦人会のメンバーにも名を連らねた捨松は、家事、育児のかたわら、幹事として働いた。日清戦争の際には、小松宮妃に随行して、広島予備病院の視察などしている。明治32年ごろ、捨松は青山女子学院で週1、2回の講義（家政、育児、看護）をする程度であった。女子教育に情熱を燃やしたかつての捨松は、家庭婦人、社交界のプリンセスとして忙殺される日々を送っていたのである。やがて、日露戦争になると、育児から解放されたこともあって、捨松は、渋谷の日赤本社病院で、週3、4日も看護活動に明け暮れるようになる。ハンカチーフ以上の重い物は持ったこともないという貴婦人たちと違い、捨松は活動的な性格の持主であり、有資格看護婦でもあったからだった。そして、何よりも磨かれた彼女の国際的センスは、日露戦争が持つ意味を重大なものとして受け止めていたからであった。夫元帥が先頭に立って戦っている時、彼女は救護活動をしていたのである。

捨松は、『^{ほととぎす}不如婦』の浪子の継母として撰せられ、継子いじめと世間の誤解を招くことになったが、彼女は保健衛生の知識があったため、結核の感染予防に努めていたのであった。また、家庭経営にも秀れた手腕を見せ、合理的な家事のきりもりをしたが、世間はそんな才覚を、“男勝り”ととらえたのだった。

捨松は、当初目指した女子教育に対する情熱を十分発揮することはできなかったが、女子留学生時代の親友の津田梅子の援助を続け、間接的ながら、女子教育に関与した。彼女自身が直接的に参加したのは、女子に必要な学問としての看護学を啓蒙すること、慈善活動によって社会福祉面に協力することぐらいであった。看護教育を導入することに捨松が力を貸したのは、津田梅子の女子英学塾の設立目的と同様、女子に自立の手段として、職業教育を普及することが必要である、と考えていたからとも考えられる。捨松が、独身であったとすれば、どのような活動をしたか、と想像することは大変興味深い。家事、育児に縛られながら、常に自分の意志に忠実に捨松が生きることができた背景には、夫巖の理解を無視できない。

捨松は、大正8年（1919）2月、60歳の生涯を閉じた。

アメリカの主婦作家：伝統と環境

神戸女学院大学 キャサリン・プロデリック

アメリカにおける主婦作家という現象の社会的背景を考えた場合、まず浮かびあがってくるのは経済的必要性である。19世紀末において女性が作家となり家計を支えるきっかけとなったのは、家の破産、上流階級からの転落であった。しかし、ルイザ・メイ・アルcott (Louisa May Alcott) のように主婦業に加えての作家業の重荷により健康を害し、若死するケースも多かった。

女性が出版界にとって優良市場であることは、アメリカにおける最初の大衆雑誌、並びに単行本のベストセラーが共に女性編集者、及び女性作家の手による女性向けのものであったことからうかがえる。しかし、小説内の道徳基準はブルジョワ社会の経済的現実を強化する方向に働くものであり、この現実において女性は経済的に生き残るため、結婚に依存してきた。すなわち、男性に経済的に依存する女性を描いた小説が、著者である女性作家の経済的独立を可能にするという矛盾がここに存在したのである。エリカ・ジョング (Erica Jong) の『飛ぶのが怖い』が論争をまきおこしたのは、主婦作家の葛藤について語ることにより、この矛盾を指摘したことにあるのかも知れない。

しかし、男性はこの葛藤に気付かないばかりか、時には女性が書くことに真っ向から反対する。ロバート・サウジ (Robert Southey) は女性の本来の仕事であるとされている家事に専念していれば筆を執る暇などないと主張する。この場合、女性とは既婚の子持ちの女性だけを指すわけではない。19世紀においては、いかなる女性作家も、作家だからといって家事を放棄しようと考えた者はいなかった。そして彼女らは絶え間ない雑用の合い間を見つけては書き続けたのであった。キャサリン・アン・ポーター (Katherine Anne Porter) が『愚者の船』を書きあげるのに20年を要したのも、こういった背景ゆえんである。

主婦作家を定義づける際、次の3項目が助けとなるであろう。まず、(1)既婚で、経済的には夫に依存、家庭内の非生産的の仕事に従事し、主婦としての役割を他の役割より優先させている女性。しかしこの定義は、未婚であっても既婚女性と同様に、家庭にアイデンティティーを持ち、経済的にも社会的にも父親などの男性に依存している女性作家を含まないという点で不完全である。(2)本来の「作家」としてのアイデンティティーを持つことを社会的に許されていない女性作家。(3)主婦作家の分類に入らないポーボワール (Simone de Beauvoir)、V・ウルフ (Virginia Woolf) など主要アイデンティティーを作家に見いだした女性作家を除外したあとに残る女性。これら3項目である。

主婦作家とはすなわち『主婦作家として成功するには』という著作に示されているアドバイス――

洗濯物をたたみながら書きだしの文章を考え、皿洗いをしながら電話で話せるよう電話に長いコードを取りつけ、スープをまぜながら筋を練るというアドバイス——の価値を理解する作家を指すのである。

約20年前までは文学作品中の主婦と実際的主婦には共通点がありません、ケイト・ショパン(Kate Chopin)の小説『めざめ』の主人公エドナ・ポンテリエは例外的な存在であった。この頃までの大部分の作品中の主婦は、『若草物語』のマーチ夫人や『燈台へ』のラムセイ夫人のように男性によって定義づけられた女の役割の伝統を受け継ぐものであった。『めざめ』が出版禁止処分を受けたことを考えれば、どうして『めざめ』以外の作品中ではそのような歪められた描写がなされたのかが理解できる。しかし最近やっと主婦の真の状況を描いた小説も現れはじめています。

どうして長年主婦作家が真実を語れなかったかという、一つには女性作家は受け入れられなかったため、男性のペンネームを使い、男性が書いたかのように書かねばならなかったからである。さらに彼女達は、家事の合い間に隠れて書かねばならなかったことも一つの要因となっている。今日になってやっと女性作家は書くことにプライドを持つようになってきているが、これは「主婦へのユーモアをまじえたアドバイス」と表現できるサブジャンルが生まれ、この種の本が常にベストセラーになったためでもある。

無論、主婦作家は、何人もの子供を生み、育て、掃除、洗濯の合い間に何とか時間をみつけて書くといった肉体的に困難な状況にさらされているばかりでなく、社会的に押しつけられた女らしさ、主婦、母親の定義と作家との対立から生ずる精神的葛藤という障害も乗り越えなければならない。主婦作家の最大の功績は、このような数々の障害にもめげず、価値ある作品を残したという点にあるのかも知れない。



第6回研究報告会のお知らせ

報告者 渥美育子（青山学院大学）
テーマ ニューイングランドにおける女性学
日時 11月14日（土）午後2時～4時30分 終了後同所にて6時まで懇談会を予定
場所 早稲田大学法商研究棟5階の商学部大会議室
地下鉄東西線早稲田下車 徒歩5分で早大正門へ。または国電高田馬場下車 学
バスに乗り換え早大正門前へ。法商研究棟は正門を入れて左側の9階建の建物で
す。
会費 500円

渥美さんはハーバード大学から9月末帰国されました。女性学
の盛んな米西海岸とは一味違った、ニューイングランドに
おける女性学の現況を見てこられたので、印象もホットなり
ちに御報告をお願いしました。なお、今回は会終了後かねて
から会員諸姉より御要望のあった、親睦のためのお茶の一時
を持ちたいと思います。



第7回研究報告会のお知らせ

報告者 桑原糸子
テーマ フランス革命期のフェミニズム——コンドルセのフェミニズムを中心に
日時 12月5日（土）午後2時～4時30分
場所 東京都教育会館 新宿区赤城元町16
地下鉄東西線神楽坂（神楽口）下車 徒歩2分 赤城神社隣り
会費 500円

「男女平等思想を政治的平等原理の一内容となし得なかったフランス革命
期を背景とするコンドルセ（1743-1794、数学者、哲学者、ジロンド派
議員）のフェミニズムについて、(1)男女不平等を正当化する3つの動機に
対する批判、(2)女性の人権擁護と自立の主張、を報告する」——桑原さん
御自身の書いてこられた文章です。すでに第4回研究報告会で白井堯子さ
んより、同時代のイギリスの思想家メアリ・ウルストンクラフトについ
ての御報告を聞いておりますが、対照しつつ学ぶよい機会だと思いたす
で、多数御参加ください。

会員の著作

最近発行された会員の方々の出版物を御紹介します。なお、ほかにも会員の方々で書物を出版された方、される方、事務局に御一報くだされば御紹介させていただきます。雑誌や紀要に載せられた論文等につきましては、とても事務局の目では追い切れませんので、これまでは割愛しておりましたが、御連絡のありました分については御紹介させていただきますよう、あらためます。謙遜にも業績をひけらかすことをためらっておられる方々に、女性学に関する情報ネットワークの不十分な現状では、この欄を利用して伝え合うことが、同学の諸姉兄への小さな義務だとお考えいただいて、進んで御連絡くださることを切望いたします。なお※印は御寄贈いただいたものです。誌上より厚く御礼申し上げます。

○青木やよひ『子供をゆがめるものは何か』灯台ブックス60, 第三文明社, 1981年, 680円※

○安田富貴子「井上八千代(京舞)」(『芸道の花開くとき』円地文子監修・近代日本の女性史第5巻, 集英社, 1981年刊, 1300円, 所収)

○漆田和代「保井コノ(博士一号)」(『苦難と栄光の先駆者』同上第11巻, 集英社, 1981年刊, 1300円, 所収)

○亀山美知子「日本近代看護史における看護婦の社会的地位・評価に関する研究」(雑誌『看護』第32巻6号, 1980年5月より連載中)※

○星野澄子「戸籍・国籍法と性差別」(雑誌『現代の眼』現代評論社, 1981年10月号, 所収)※



事務局から

◎『思想の科学』1981年7月号の「女性学入門」特集には多数の会員が執筆しております。入手困難になる前に事務局で在庫をブールいたしましたので、書店で買えなかった方は御注文ください。定価580円のところを、送料こみ600円(切手なら60円か100円切手が望ましい)でお頒けいたします。多分野にわたっていろいろな傾向の筆者がバランスよく配され、広く女性学全般を見渡してみるのに便利な本です。

◎東京都の婦人情報センターからニュースレターの寄贈の要望を受けましたのをきっかけに、同センター、国立婦人教育会館資料室、お茶の水女子大学女性文化資料館、労働省婦人少年局資料室

その他、日本女性学会の活動状況を知っていただきたい公的機関やグループに対し、ニュースレターを寄贈することになりました。もし資料の相互交換をしていただけるならば、入手できた資料を、今後必要に応じ誌上で御紹介して行きたいと思えます。

◎ニュースレターの編集を手伝ってくださる方を募集いたしましたところ、津田塾大学4年生の大賀美弥子さんが応じてくださり、幹事会でも了承されました。次の9号から手伝ってもらいます。同大学の女性問題研究会である蝶(はべる)の中心メンバーのお1人です。

◎国立婦人教育会館の主催する昭和56年度女性学講座において、来たる10月24日、「女性学への期待」と題するシンポジウムが開かれます。4グループ(日本女性学会、国際女性学会、女性学研究会、日本女性学研究会)から1名ずつの代表者を求められましたので、日本女性学会からは漆田和代さんに出席してもらいます。参加者は国立婦人教育会館が募ってすでに定員に達しておりますので、残念ながら傍聴はできません。ニュースの次号でいくらかなりとシンポジウムの模様をお知らせする予定です。なお、9月20日(土)には、すでにこの講座の第1回目に招かれた松原純子さんが、「自然科学と女性」と題して講義をしておられます。

◎比較思想学会の要請で、福井浅子さんが「女性学について」と題する報告をすることになりました。来年1月16日(土)午後、場所は大正大学で。詳細は 〆の福井さんのところにお問い合せください。

編集後記

○1日だけ胸もとを飾った赤い羽根。ペン皿の中ではやホコリをかぶりつつあるのに、なぜかまだ捨てられない。(漆田)

発行 日本女性学会

〒103 東京都中央区八重洲1-4-21

共同ビル13F 西洋美術研究会内

電話 03-274-1791
